

# 外國叢書

異國

常陸國多珂郡磯原村 船頭  
以下安南、漂流始末  
明和二年漂流 全四年歸朝  
安南國漂流記 大川少郎  
外國叢書 八  
薩藩古渡七郎右衛門 以下  
漂流始末  
文化十一年漂流 全三年歸朝  
外  
文化薩人漂流記 以下  
合見之

庫	文	閣	内
一八四函	三五二九		和
一三架	三〇冊	四號	書
		類	

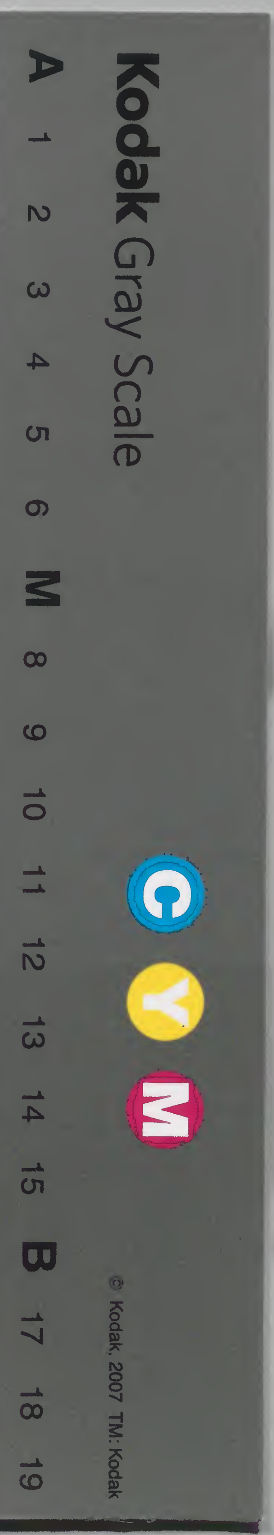
和書門	三五二九四	函	架	冊	三〇
類	號	架	冊	架	冊

内閣文庫	番號	和 35294
	冊數	30 ( 7 )
	函號	184 267

409  
閣  
431

共三十

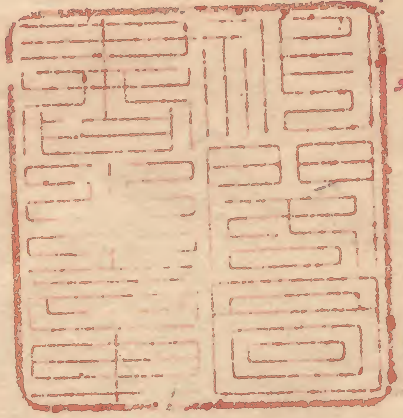
七





別  
409

海國  
用典  
異國  
漂蕩  
記聞



安南國へ漂流し一帯陸の國破る浦あり  
等唐船の便りといふ帰朝せし法

帯陸國多阿郡

佐平  
三十五

水

友七

三十五

名馬

四十一

三十五

一帯陸國破る浦あり  
四人等紀明和二年十月十日  
小名湊より船中より











初國へ立陣しきも青くく人の極楽をあり孤島へ本  
こゝに神を考せしと神佛一併せしりやうさけらるの巳の  
刻より東丸に乗り申西の力を極楽を走りぬけぬや  
糧米も少しかくたれどもかゝりあつたも日くもあつたふ  
く咽と道しぬれぬををわしと魚くやしぬのたれハ  
米少きをすくふ人の食ひぬ炊きぬとほくぬ減して  
米二物とふ人きく一日の食とあせりぬたぬふ人を  
二夜暮人紀州もあつた帆と楫とをらやつたも  
心は伊とさうしぬとなりぬとんビキとふ奥の船をあは  
ぬ遊踊するもろあはぬ釘と板物とあし麻草とを雲の  
糸とあし絆とさうしぬと行なげぬたせしとさう

三島と釣りけく食とあしとさうしぬ甲の米とさし  
より是全く伊神の擁護あつたふ所と法とく難有  
り膳を徹しよりお廿三日より十日までとあはぬ  
西へ西へ流れきく十日の船路と山を足ぬしぬ其業し  
さうせんさうかく物とく種とくそれ心記しぬ人きり  
カとあし神とあさうと人の極楽を焼山のあがりぬ  
初ととあしぬ外彼所け行なつたも山を足ぬぬ  
初と初とあしぬとあしぬ人あはぬとあはぬ  
あはぬとあはぬのあはぬ山を足ぬぬ西の方とあは  
ぬの極楽のあはぬとあはぬとあはぬとあはぬとあはぬ  
休もやとあはぬとあはぬとあはぬとあはぬとあはぬ











佐立おとむらう喰も又昔人とてくぬなりし時を八  
十人なり付居しうぬもさ七人下減ぬけ付て申され  
とも直き思つ強堪能く何るもの山より木の葉の如く伐  
採日係しおし是しう十三日の夜成の刻に足櫛と外し  
二三町と隔てし流の千里方所へ送り明も入食もとま  
りう村長もいりあへき人のあつ付の多くも細問ひし  
孰もぬしかりし辭通てす又彼明も入連向りし人あり  
片もつても然りきし昔もまの解世前もとまを汲り  
此の國と是との名を問ひし安南國とて此色に二二六  
とよふしと答ふ明も明和三年成の事目しを付里と  
見候共取毎門きり葉第一おつまきとて候いし

ひねりもいりしお中書りしにおくしらん御法の又人の  
いふものありし所主村のあくしう果と昔の集まを  
以飢を凌ぎ多れ此所へ漂ふしうより五日十者まの食料をばたし  
四景文の抄うく坊の異しき之を辨しと  
くも同じくさうこ 亦くも謝見知れまらぬ事ある果まの幕杖  
あのみ借いりし果と昔の産家をばたきくもさ  
二日よあり南京のユラウリサとよものよし物影の  
きうく物語すく何りまらぬもぬも辭の床をばた  
帰影をんと相しよあきりうとくあくも付の  
村長の伴し行智く物語りしとまゆり長崎へ  
送り物まへしといひ割れぬを後日サ三三コウリとあり  
く兼く物せしめく見入日記しと海へ入しとて候り











権とと打也波せしやん 祀族と御めよあのみきふは英  
しん保 相を年しそら世共果のぬりり 主國の場ととも討  
と候ふとんはははあてん 只あ何りしとさ古々のをり  
されとと年い南島の 祀便よまうとさしと候人のりし  
へたれいまを頼くふくはなれふとしと飢渴と凄しと  
二日十昔南島の 商人トシタリシとふ人 船を日本の人  
親流しとけふあふとしあふとけくさくはそくしと  
しとくふくと其旅亭へ 振と難肉よまは(因)源  
流せしよりけしとのりも 亭岡のむく日布への便紅  
何れまじり仰へし先まを けけ候へ来りぬしとお鈴  
の祥うくしひさへふ 即平帝祈禱ふ存の神佛の

か護くくかは情何く人のすまをさしとと或候御よ  
ゆり 祈候しとまきとすみ候まより 船より上り候人の様  
を信しと 戯副三遊撰庵より候も 情深くとすまより  
是よりトシダイをしと 親方しとあへくはえく年の以を  
二千餘年ありしとく 御しとす政事傷くしとる  
七人のあへお鈴の 狼よ仕立し 草物十四雲踏十四是抄  
九や文とあてふと 時しと是れより 昔百二十  
年ありしとあへく 船南島の 舟のしとあ南の海  
に書文お押の 主機と御しと 回る日舟よをけを  
の湊よりあより 舟へ 船と 舟海舟しとあはへしとタイ  
撰撰庵ありしと 船舟よあへく 七人を 船以王世書抄

一書 財副と撰撰  
庵とわくけしと撰撰  
庵とわくけしと撰撰  
三と名物よと撰撰  
とんくうと撰撰  
とんくうと撰撰







一 寺に正南園をいふは  
廻廊とハコトをいふは  
又堂にハコトと書くは  
又堂にハコトと書くは  
又堂にハコトと書くは

一 寺に女子の娘留りの  
後より御の仕立を  
又堂にハコトと書くは  
又堂にハコトと書くは  
又堂にハコトと書くは

一 家くは飄々としてあるは  
新ありしはれは  
四戸とありし内を  
あつたり

一 朝夕の食よりハ  
後より大由の  
つ集り着或るは  
く喰ふむ多るは

一 衣類を質者  
とも唐園の  
男女ともハ

一 寺に男女の  
又堂にハコトと書くは  
又堂にハコトと書くは  
又堂にハコトと書くは

一 寺にハコトと書くは  
又堂にハコトと書くは  
又堂にハコトと書くは  
又堂にハコトと書くは

湯堂ありは  
と平倉の  
けを足ハ  
の粉菓と  
今あるは  
形を正  
大腕を  
又寺ハ  
三ヶ寺ハ  
二海園ハ  
正字の

一 寺にハコトと書くは  
又堂にハコトと書くは  
又堂にハコトと書くは  
又堂にハコトと書くは







たをよ十八挺の槍と立十人をもとあせたり  
証を鞆と以嚙しハイハイとふ鞍渡の船あ後と争ひ  
漕河に動ぬり

一南島人又横引れ 今あよりと里より向ふ村里へ  
象を足あよりりゝ象あせと畜またりと又一丈  
たのりうゝ角色せ世或も菓あたと食料とす  
ふゝ象のあへ 砂と砂と集ゝ一砂と  
まを取皆とあうまねくゝ海とつら又世の葉蓋は  
と鼻とくまねねゝ 鏡とく川とつら又切れと  
又象をほあくを象の背と夫念のほあれ物とを  
新のぬゝ地と四とあう水何とありの象あはると

一ちよあ南島のふ  
象をぞとよはる  
心ヤルウとよと  
い

昔く心方りして六國主の御まゝとあひ付れ

一七日于草を造るあゝまねくゝとんゝとあう  
もあうと又奪てと三ああゝとんゝと外槍を  
くあへ人余方り四方とん形物ありとを食取り  
て新り其とあゝと織物と地十三人ゝと昇と外  
鏡とのあう物を傳りゝ興三ツ四ツ方又位牌の紙  
本とを織物と書行と危の上と載せゝと七人ゝ  
持又長刀の紙本物とるむゝた者ゝ對し立列ぬ  
そおゝとんを籠ゝの紙中とあゝと籠天蓋と四五十  
切りと立候とんを甲とあゝとつとる籠とあゝ  
帯も同ゝ紙本物とあゝと油と後あゝと一とあゝ

一ちよ于草を造る  
あゝとよはる  
心ヤルウとよと  
い



あまの國御曲を因一  
會あり此のちにて  
陸の四立十重のり  
一古よん(一)

古三間中りの幕と川中一と中と赤り一と人衆のや  
うんへは権の赤と紅と鬼の如く新り決の権と  
換へたなう一人つと勢國と又倍十人なり風色の衣  
二か名抄袋と尺さうりとの物影の傍と勢のやれ一又  
胡る三味線笛華業江登を報て外尺も列さ  
け鳴物と打鳴一とぬぬ三万人物通り一と世徳國  
の風俗とくあんなれ一と中中り幕埋のりぬく  
あゆま権を屋を下中りのものをあたま権を埋え  
能ま一とま一と式と後の幕礼の式と権りよとと  
南島のトシタイクワン島南王の居所ホイホ二國とやん  
りよあへり一と時國とよ一と地送とあや一と法條ぬれあゆ

あまの國御曲を因一  
會あり此のちにて  
陸の四立十重のり  
一古よん(一)

一古よん(一)  
焼くまると杉材あり  
三木と尺す材木あり  
くまを不、まてだ  
り又難材材木あり  
ゆりく名物と尺一  
これら三木と尺あり  
可し

あまの國の火と横舟の所硫黄と附一折木と甲のりぬく  
ちの作火と葉木へ吹舟ぬれハ忽火移れぬる年竟  
を暖國の薪葉木とも乾火葉梅りあさともと  
くあく漂えぬ以船道是を碑と焚く一折木ぬく  
火燃へ移り一と火と國一と

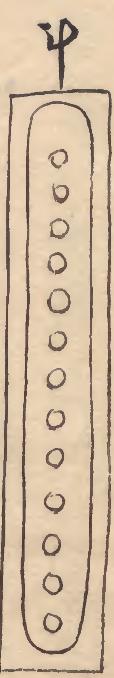
あまの國の船作を一年よ再収するも一権を陸田一苗と  
七立玉綱目苗と植く三苗よ川五日苗と植く九日よ  
川田と植ゆるも お新のみくあれも苗と倒る  
ぬく根をかきよと植る 稲の丈を七八よぬる







引し又小粒としりりのをい尺すやあう〜或人あく  
よ金と尺を〜と散れは四十五ふとあり原さ三分



四町〜〜中〜〜極下

方きとせ十日証さ、常々通年ちれ物さ尺す砂  
三十五と百文と定依〜徳園の一冊又を

本朝の六百文とあれさ〜もトウ〜〜極トシタイウシ  
し南東より注せと積集りあ司う〜一万二千文法さ  
うふ〜〜付れ〜〜砂とす〜

一 東南國より買積し産物方砂糖胡椒牛角牛皮糸  
牙種石奇楠柄錠菜種の新と外孔雀單羽野錦

鳥のぬくぬく猫のぬく尾のせ尻鞆ぬく産物ぬく  
尺ぬく長四人〜〜思ふは寸或一人のぬく物有

一 今あ〜〜砂糖と存送り〜〜尺〜〜竹と物と況  
のぬ〜〜若う庭〜砂糖と山のぬ〜〜ヤケ〜と煙流  
のぬ〜〜物ぬ〜〜入法方橋也 本朝の土中依位

〜〜〜や白と物ぬぬ〜〜年〜〜形〜〜砂千墨積入ぬ  
〜〜外十七八艘の南東船〜〜ぬ〜〜と〜〜思〜〜積  
入〜〜東南もの産ぬぬ砂糖才一と思とれ

一 東南國の去年の暦と買ひい〜〜國号年号法新とさの  
大越景興二十七年と何りあき同月 本朝東南をたぬ也清  
朝七十年と何り〜〜清朝とは別國別と〜思〜ぬぬ

一 書は砂糖の價は十五  
中用入二金とある砂  
二年又位こ〜〜物  
引れ六斤百五十日  
〜〜を〜〜  
竹の價は長物砂と  
又〜〜

一 書は五五の日は易  
〜〜人〜〜外に物  
〜〜の力〜〜















竹多といはずとあるが、その内船長船よるは  
三ノ水と湯と那と云ふ前々檣帆帆  
伐折りてしむの風は信をく西と流れ  
海と海あり日影を兼ふハ半三日月  
正月廿三日と安南國の吾の郷といふ所へ船着りて  
了て年の二月十日とて逗留とて一國郡田を  
大城國とせんといふ所へまゝとて一日ありて  
一まづり川ありてせられ昼夜漕舟  
十番と四本國大城國とやと所へまゝとて  
城の市街より尺とあるも城郭のありし  
むねまづけが今の千町余とありて又前

皇徳王とヤと祖とれ  
年の表の内ありて鳴ゆき停止ありて但し  
國と村とれ一の所ありて安南國との部城  
を河とありて一の國との名を純花と稱し  
今安の邊より中里河と云へり

一 略して國へ渡りてしむの山と見たりて船を  
寄とれし人の拙き山ありて内は信を西と云  
てりて安南國名の郷と上陸して然れども人  
れ何國といふと云ふ若也 船の地と云ふ  
と林の中へ入りて人を奪取のてりて列れ











是を髪より〜後所へ送さる掃を〜う机に本館の如し  
南京人の机を画し書し〜唐机と云ふありあり

一 安南人を硯と用ひて碗と墨と摺り入るを硯石と用ひて  
硯石といふものあり〜唐机も大申を踏を以し衣履を  
貴人をも本館の胸衣のみき物とりよ是す上下とある家  
従りとも是れ又平履城名は〜布衣といひ南京の人の  
上衣と布衫フウサシといひ糸襪川カハの所或ものを禪ぜんといひ是等と  
襪といひ帽とマツウといふ

一 安南人〜擔かたと肩かたをふらふを裸裸と云ふ横鼻禪を  
と云ふ〜但本館のぬく禪の端垂を〜

一 馬を 本館と同〜農民を牛と使ひ官人を馬と飼ひ立

牛を飼て〜氣色よく馬毛はあめのみし角曲り〜

本館の牛とはかしく遠い〜既ハトハ板を製すなり  
食よよの如きあり

一 今本の北西を北と云ふの町裏に有る〜作掛きあり  
裏と裏〜竹物を琵琶と弾く勿論琴三味線もあり  
揚沙一帯あり又百沙位の砂〜ものあり衣履も  
綿細ハ糸綴子あり但〜益漆の如地あり〜  
漆石も何れと云ふ地漆〜漆を〜

一 會本の町は標南あり拾文高といふ文字を書し着板と  
わ〜並四刻あり墓ハ一の裏ハ六二の裏ハ五〜  
本館の名有り考りあり〜大振り〜〜



ぬけ篋と四の上は穴ありあまうす穴入るは四を  
く結負を分別もほあり

一 双三盤有りては方巾敷に向し碁象碁盤もあ  
碁を打組む 巾敷に向しあはれも結負の石を  
くぬきぬきとぬ結と一目をみよぬきあ

一 紙牌を表は種々の鳥を書皆は黒文に唐色こ  
帰人の懸は 巾敷をくあはれをぬきあ  
すぬきあ

一 安南の人のぬきぬき碁定とあはれ時を碁本と  
人ハ 巾敷のぬき十段碁とあはれぬき碁  
上の五五一つあ

一 ト有りの碁本より判紙を市街より十二段  
ああり

一 幣を捲くも 巾敷の正帯のぬきああり傘  
柄の強き帯とあはれぬきあ

一 窓扇を檜櫛の葉のぬきああ木の葉と  
種々ぬきあはれぬきああ木の葉と一尺  
二三丈ありぬきああ木の葉と一尺  
あはれぬきあはれぬきあ

一 扇子のあまうすあまうすのぬきああ  
一 佛あはれぬきあはれぬきああ  
一 器物を四方よりあはれぬきあ



も亦同

一飯を炊く濁を口細く〜〜お製の細茶をそのぬく

一水を取りお瓶を巾の巾巾巾として冷たく〜桶にぬく

粉あり

一茶濁茶をき皆お瓶あり釜を平合よくお製のぬ

くあふいふ

一料理を煮〜〜油揚あり煎よし油濁あり〜て合す

その油を木の實を以絞る

一候を粉〜〜絞る煮〜蒸〜〜蒸餅とあるは

安南の人煮い〜〜喰い〜〜中〜〜〜合す

名〜〜合せさふん〜〜

一合子を薄のかしほの指〜〜お銘あり〜〜割す

十文字打きほり何れし又を分〜〜漬二〜〜

一秤も大小二を〜〜五升ハ中入〜〜有南あり〜〜用也

丸盤は似る

一靴あり 靴製の泥靴製製と同〜〜あり木〜〜扱〜〜

きよあひあり

一牌金と〜〜の方七と〜〜一尺と〜〜箱入す〜〜一粧涉二〜〜

わとよあひあり

一唐紅毛船も錠い〜〜あり〜〜造馬西海に海危泥

ふれ〜〜〜〜〜細も多〜〜核欄と申也

一雁のり皆嘴黒〜〜露者 靴製と同〜〜名を足〜〜



開しゆもあし又又野寺とく緑色の奥しきま何り  
 坊官をとり人の口を似とせしむるなり 勢よりかし  
 く大しとく背をく張る白と班何り 孔雀一羽五百文  
 位あり 三羽五百文位は意あらずなり  
 一 松の本を多く見し寺の庭に一木何れをんし  
 本影の松もも皮目なりしとくまきとれ目あり  
 一 石碑も何りし自然石あり 巻石何りし蓋石あり  
 一 今ある南へ四日路行ハコナイハツテといふ所何り南の根  
 ありを南よ山と隔く 園何り名を忘れしけふまある  
 と不和しと通信あり 掃き糸命すれり何れも必事い  
 よふといふなりとすなり

一 け年あるの年号 景興二十八年なり 中古の念と交りたり  
 別々年号と立曆をも建といふ  
 一 丑月夏山の巾着とく人形あり南へ移れり  
 一 市街より開王像一幅と沙百文の買あり 彩色せしは  
 画の風お絵画に似たり  
 一 昔月書きた幟とまけ軒の甚と外より足あり 高草と藪へ  
 く接しなり  
 一 七月の盆祭あり 高より 精霊棚へおそ位牌と席り  
 又ま三界十方仏と書く 表装し 高めく板へおそと法  
 蓮又寺院よりハ旅縁鬼とんく檀を席り板より  
 大位牌と作り土色の帯へ 三界十方佛と書く 法台







下筆字以知你船行何處至此

一令あの役人の涉へしや  
影書彼の所の人紙に  
とんと書しむ

日本天下水戸國六人乞付  
回去上海船

乙大翁臺下批上海船回唐乃  
付候駮准許行勿阻當茲イ

一令あの人紙に  
やしたのめく書しむ  
役人の涉へ  
しや

日本人披風飄到貴處不得回呀



而令存九人等

望

諸公率照憐憫

前日約此日本人九名配給全上海船回

唐由前日已給配完然各船長言外國之  
民不敢載回上海船如別艘回廣通亦不  
敢載各船長有許錢此二少錢為火食待  
後日有船去港口即載行得回本國

林美廣等名可說與知



景興二十六年朱月十八日

丙戌七月大官出

一南東の便形了ちるあつてすゝく今あの方府より  
物々しちの書面人と頼りて字をいり  
一今あの人来りてたのめく書く足るはるはる

五月間我兒在店外許你米錢至今

你不記得

生生鳳記花素羽細棟選洋機  
加上製作經緯純熟顏色鮮明  
與眾迥異今蘇州間門外接  
宮亭開張門面照號發客誠恐  
無耻之輩混將低貨假冒本號  
各色欺詐客商為此時加訪  
帖允賜顧者須認明生生鳳記  
招牌圖書方不致悞謹此告白



一年あの人たのぬく書くはしりし書の字

前日日本各人工夫再  
明日来送錢添火食

悲歡離合三杯酒南北東西罵蹄

前日十一月下處大官借来此

一南東の祀之トシタイ冬レ  
此名ハ曹々  
休之ト云 安南之祀セし  
日深の草行を尺一  
一写しきりたのぬ

欽差内務府崔景山船長林舫押艚曹休三  
謝靈昭替首拜謹  
奏為承用本艚通船行李谷貨物撰調奉納  
上上御着

- 一日本國古銅大花瓶式件
- 一日本國古銅香爐式件
- 一古銅小花瓶一件



- 一 細畫古人名圖手卷式画
- 一 細顧繡定織寶監物断各色囊拾部
- 一 宜興各色花魚缸式隻
- 一 宜興各樣

一 今あるべきを雇ひし傍り或るもひし 抄と南島の  
 人々新布のよ其の代りぬるゝとく 紗後一丈ふり  
 とへゝゝその紗と色ゝ 帯たのぬき文字あり

按今日本船人可工下送焚下  
 處大官

今有上海艘茲年旌生理日本國後日  
 我交日本等名許上海艘逆回本國



於汝等前年難蓮遇風飄入  
 貴國事在天也幸得平安汝  
 七人命在前定而已目下年  
 福遇上海船欲往日本早歸  
 故鄉見父母妻兒幸甚可賀

亥三月朔日

一 林美廣といふをコウウシサカハル名あり節惟結といふ福所の  
 人にも逢ふなり又ふくと申せ来りし世を船の中へ津を  
 とりて欽差内務と記されしに取返しし  
 一 船中の菩薩様と申す所を金銀を以てしやあり  
 を以て祝ふ

一 家々三人の如く三年亥七月廿三日世を船よりよりおれ  
 世帯のより所々踏給りしものありし後樹をいられ  
 毛後漂流よりある國に在るをいぬのふまはゆいられ曰  
 有り口書といふものをいひて長持の袋をいれ  
 させられしと申されし正白といふ所を京院くの江府へ  
 伴禮よふと申されし所をいれしと申すもいしは伴付



同日と月十五日と申候と立出申す所の國小倉の御下  
より新米あり二百石と申候一石新米又と申す所同様に  
月廿一日と申候一石と申候定まり一石と申候小  
名の濱を支配する所代官薩山北記へ後れあり  
是りの人附法目日廿二日吉々小名の濱より  
是の

薩摩中将齊興朝臣の末孫古後七郎と申候川  
伊予国税前長尾の事 船子も琉球國  
廣東省へ飄流して唐船の便りも是れ等  
新米の事

文化十年之薩摩の代官新納次郎九郎琉球國の  
大島(在番)と申候一石と申候古後七郎と申候川  
伊予国税前長尾の事 伊集院清重の江川令三郎と申候  
のものも新納次郎の御事と申候一石と申候  
是の事日付後並川と申候 舟子九郎と申候同様に  
三百廿一日薩摩島の濱を新米一石と申候大島  
新米と申候在番と申候一石と申候代官一石と申候



































と買回又縁取より後二申すとある一〇徳吉兵衛とあり  
と云ふ人より水と云ふ一〇徳吉兵衛とありと云ふ人より  
知徳の下後と云ふ一〇徳吉兵衛とありと云ふ人より  
の事と云ふ一〇徳吉兵衛とありと云ふ人より

いふ花と云ふ一〇徳吉兵衛とありと云ふ人より  
いふ揚物と云ふ一〇徳吉兵衛とありと云ふ人より  
豆腐と云ふ一〇徳吉兵衛とありと云ふ人より  
煎り煎り一〇徳吉兵衛とありと云ふ人より  
一〇徳吉兵衛とありと云ふ人より  
一〇徳吉兵衛とありと云ふ人より  
一〇徳吉兵衛とありと云ふ人より  
一〇徳吉兵衛とありと云ふ人より  
一〇徳吉兵衛とありと云ふ人より

姓名を記し縁取の煩ひをすべしと記しあり  
姓名を記し縁取の煩ひをすべしと記しあり

此色申付のものと尋ねて一〇徳吉兵衛とありと云ふ人より  
候補縁取の煩ひをすべしと記しありと云ふ人より

者一〇徳吉兵衛とありと云ふ人より  
者一〇徳吉兵衛とありと云ふ人より

よを外の小吏仕形とありと云ふ人より  
よを外の小吏仕形とありと云ふ人より

或を柳籠裏のゆい袖と記しありと云ふ人より  
或を柳籠裏のゆい袖と記しありと云ふ人より

此の縁取の煩ひをすべしと記しありと云ふ人より  
此の縁取の煩ひをすべしと記しありと云ふ人より

此の縁取の煩ひをすべしと記しありと云ふ人より  
此の縁取の煩ひをすべしと記しありと云ふ人より

此の縁取の煩ひをすべしと記しありと云ふ人より  
此の縁取の煩ひをすべしと記しありと云ふ人より

此の縁取の煩ひをすべしと記しありと云ふ人より  
此の縁取の煩ひをすべしと記しありと云ふ人より

此の縁取の煩ひをすべしと記しありと云ふ人より  
此の縁取の煩ひをすべしと記しありと云ふ人より

此の縁取の煩ひをすべしと記しありと云ふ人より  
此の縁取の煩ひをすべしと記しありと云ふ人より

此の縁取の煩ひをすべしと記しありと云ふ人より  
此の縁取の煩ひをすべしと記しありと云ふ人より

此の縁取の煩ひをすべしと記しありと云ふ人より  
此の縁取の煩ひをすべしと記しありと云ふ人より

此の縁取の煩ひをすべしと記しありと云ふ人より  
此の縁取の煩ひをすべしと記しありと云ふ人より











おまゝの海を一也 陸路船を安しり 陸路船

と導きし 陸路船の四つに小舟の知れぬもの

陸山同しり 船を所す げ 船を市街に凡て 四定

と見くくす ても 葉と多く 極す 陸路船の

竹瓦俵の内ありし 夫より 東莞俵をり 船をり

せり 船中 也 土地の船に凡す 陸路船の

二所 とも 船をり 陸路船の 船をり 船をり

いふ 夫より 船をり 船をり 船をり

と幸い 船をり 船をり 船をり

船をり 船をり 船をり

船をり 船をり 船をり

船をり 船をり 船をり

船をり 船をり 船をり

船をり 船をり 船をり

船をり 船をり 船をり

船をり 船をり 船をり

船をり 船をり 船をり

船をり 船をり 船をり

船をり 船をり 船をり

船をり 船をり 船をり

船をり 船をり 船をり

船をり 船をり 船をり

船をり 船をり 船をり

船をり 船をり 船をり

船をり 船をり 船をり

船をり 船をり 船をり

船をり 船をり 船をり

船をり 船をり 船をり



由と見せしめ 唐の海内を以て其の海と号すは 外國の船も  
我友小吏と号し 入に 漢の海に 盜賊 不入 其の 海と 號すは 其の 把持 移  
清の 友と 号し 其の 海と 號すは 把持 正七 其の 海と 號すは 其の 友と 號すは

陰を 朝鮮の 陰より 舟を 新あり 又竹の 矢を 砲

丁の 矢を 舟を 後の日 舟と 見ん 又舟の 右に 矢を 矢を 以

を 舟と 見ん 舟を 外 徳 外國の 高 鐵と 見ん 舟を 矢を 以

の 舟を 舟を 舟を 舟と 見ん 舟を 舟と 舟を 舟と 舟を 舟と

入す 舟を 舟を 舟を 舟と 見ん 舟を 舟と 舟を 舟と 舟を 舟と

舟を 舟を 舟を 舟と 見ん 舟を 舟と 舟を 舟と 舟を 舟と

舟を 舟を 舟を 舟と 見ん 舟を 舟と 舟を 舟と 舟を 舟と

舟を 舟を 舟を 舟と 見ん 舟を 舟と 舟を 舟と 舟を 舟と

舟を 舟を 舟を 舟と 見ん 舟を 舟と 舟を 舟と 舟を 舟と

舟を 舟を 舟を 舟と 見ん 舟を 舟と 舟を 舟と 舟を 舟と

舟を 舟を 舟を 舟と 見ん 舟を 舟と 舟を 舟と 舟を 舟と

舟を 舟を 舟を 舟と 見ん 舟を 舟と 舟を 舟と 舟を 舟と

舟を 舟を 舟を 舟と 見ん 舟を 舟と 舟を 舟と 舟を 舟と

舟を 舟を 舟を 舟と 見ん 舟を 舟と 舟を 舟と 舟を 舟と

舟を 舟を 舟を 舟と 見ん 舟を 舟と 舟を 舟と 舟を 舟と

舟を 舟を 舟を 舟と 見ん 舟を 舟と 舟を 舟と 舟を 舟と

舟を 舟を 舟を 舟と 見ん 舟を 舟と 舟を 舟と 舟を 舟と

舟を 舟を 舟を 舟と 見ん 舟を 舟と 舟を 舟と 舟を 舟と

舟を 舟を 舟を 舟と 見ん 舟を 舟と 舟を 舟と 舟を 舟と

舟を 舟を 舟を 舟と 見ん 舟を 舟と 舟を 舟と 舟を 舟と

舟を 舟を 舟を 舟と 見ん 舟を 舟と 舟を 舟と 舟を 舟と

舟を 舟を 舟を 舟と 見ん 舟を 舟と 舟を 舟と 舟を 舟と

舟を 舟を 舟を 舟と 見ん 舟を 舟と 舟を 舟と 舟を 舟と

舟を 舟を 舟を 舟と 見ん 舟を 舟と 舟を 舟と 舟を 舟と

舟を 舟を 舟を 舟と 見ん 舟を 舟と 舟を 舟と 舟を 舟と



























































東省へ吹流るるこすうまてれく左浦ふん今を得たり  
しやくののりこし洋ふ中平しよ唐國主爲の中切ふ中  
の物よまのしりるきねと也又唐國におぼりし武急れ彼  
國く抄し並しるるみれ也或る金限おほしきる代南  
のりる物るは也或る唐國く魂解ふありしりる  
しやと再急れ問りしりる先おのりしりるてありし  
しりる物るは也口書しりる物る書載しりるは  
を記し中判と名しりるは王後秘經くる富文化書  
子のやまのり唐國の國唐見ふ陽ふりる

唐國し帽子

一人物しりる目か、るる相形似てし唐東をてりるし一物  
むすく、ま外も昔物る男を髪と判びりる丸くは  
髪と三ツ折に紐たてり天威織縵子おる梅幅子と名  
るる鏡り帽子の上も古渝水晶おし玉を候りるを  
候り衣類ハ紗綾袖おを縵まといり後りし物と物と  
思得紗黄色し縵子純しと茵神、仕立素を倍又も  
皮を附テ狗をわんをいりし衣素を思り後入り  
縵也者く、是成縵子又者草ら梅幅と名しりる  
しやも素しりるを打り巾と復傘とお用の後りる  
衣類しりるし角座物にお用の水晶しりる首を帽子







以上より右に述べた二階造り家多しと云ふは、瓦とて  
御掛を並置する白色しと云ふは、塗料不飾しと云ふは、掛の寺  
に於て、おん南陽層と云ふは、清の勝王閣と入小阿金撞十前  
余りて有し下も七間之瓦とて、二階造りと云ふは、板敷と云  
井も黄色し紙も煉行色と云ふは、雲形を押し紙を法に流  
柳見の面、土物し序并詩と書、乾隆元年九月九日親  
察使凌濤書と題有し、以閣し下も序并詩と書  
紙、韓退子と云ふは、文才し閣の外面も、猿王閣と書、類を  
を右閣し左も三間四面し、右も正面、江西第一橋と  
書、以類を有し右も棟木、嘉慶十七年行造と書、  
方し、多也、以外右此家も、瓦背も、古殿し、於此有し

視多し、儀場も、硝子燈籠と燈、桃灯も有し、此  
御し、地し、此に入燈心と燈、し、すべ

一、城郭し、中、有し、と、凡、是、を、交、措、け、り、其、米、塗、を、燭  
石、階、し、城、も、石、物、を、二、三、間、程、築、立、右、石、垣、を、有、し、  
紙、有、し、塙、櫓、し、此、し、日、中、里、敷、二、里、四、程、を、し、回、を、石、門  
し、此、も、麻、を、法、を、法、城、中、掛、木、し、極、込、り、し、家、作、し、寺、と  
於、子、お、ん、町、家、家、も、乞、饒、万、し、法、炮、打、の、紙、し、地、面、流  
陰、を、し、瑞、豊、碑、し、城、も、石、垣、二、三、間、程、築、立、門、を、法、後  
と、矢、棧、河、神、し、不、有、し、町、家、名、は、し、城、中、家、作、し、寺、と、  
寺、し、此、も、お、ん、と、同、し、居、と、友、春、方、し、下、段、神、し、の、多人  
数、を、信、海、を、縁、を、城、を、表、化、の、門、し、上、櫓、神、し、不、有、し











証水野の事少くをりて

一 多穀しりふ水野の事多し牛十尺受耕他は生い  
水牛も常知し牛十尺く氣色よく角長き三人合  
方しりてりてりてりてりてりてりてりてりてりてり  
武官しりてりてりてりてりてりてりてりてりてり  
鼻と先を切烈有し陰裏も板石馬も何方産出と  
おん野馬同様に方しけ外首白毛方し馬又と心チヤウ  
と中鳥が小形しりてりてりてりてりてりてりてり  
一 辛候しりてりてりてりてりてりてりてりてりてり  
地水も水通に水通に水通に水通に水通に水通に水通に  
之を宗の法南二百四より七日迄大書何の経書に深

流人へ送留中其日以之辛候日昂く是を不取留置形  
方し地産に流流人へ送留中一向に所免に也

一 産業しりてりてりてりてりてりてりてりてりてり  
方し何事にも町並見世を也 此は尺世を紙を板  
書り着板有し紙面と相高しりてりてりてりてりてり  
石印を牛の附素麵板の粉と攪と方すハ率也 此は  
子し牛斗ふ白を攪と外 増添おんを曲に保し保し  
形も女斗ふ博系トク他も外達中ニ委心有し女斗ふ  
業と保差也 此は女も有し形に保宅形と尺清佛山  
保の遊女心を川し方と白面、尺世と法通女並指硝子  
燈籠を燈し燈り保し流流人へ送留中長く病室に



その有るは其の織縁を足る茶を調合して其後  
深流人たる由坊及泡瘡おぬき茶と大根と一依  
九一斤征も有る湯包と石と拵一重と又ハ二重と能  
く湯蓋三ツ有る湯を扱穀を焚極を仕る湯蓋、十  
人征も一回入の由唐人も湯抄をせし中、何れを  
せしむかおあり在湯を女き入り且又花形打り銀抄を  
目七又抄ト征も抄り川抄りねと七万四の又きハ万文と  
川抄り中

一耕作しより田畑有るは田を牛とて刈るを足定畑を麦菜  
種産摩芋砂糖黍畑も有るも多分桑柘竹有るは田畑を  
以て子目とし仕形、是れお抄りねと七万四の又

一祝儀しより去言上日廿二日冬あはる前夜小川御し祈  
儀お祝儀の流し、深流人も新米お取焼酒蓮  
根お片足苗子四月新の深流人も湯船より名を村果有  
し、名、諸ふと、洞ををり、深流人も附流りねと  
神深流人も字少船在神、其を中ヒヨウチマコと中  
三張板板の物を打り交言、治修地より、おを  
以外祝儀の流し足るを中

一寺院しよりお作お正名お形儀も世し碓石院廣徳禪寺、  
深流人も種多、親善し流佛像ある有る書留帳  
し寺を天石堂と、扉帝堂のお人玉虚宮と書り類を  
有し、おを流しお人佛前を二人お了流し、何れを焚有



よふ又親者者と申す同し申御是後四五百中と最  
究三之利者と申す藤し御寺知し不た人跡の泉一取  
し其を於如角色し衣を足下と申す物し衣後と申す  
以て一御流人其し由宅方つと果多事如泉意御流  
し一御流人其し暮不の葬り申且又陸奥縁の御寺  
多事多事有と申す御流人其し御流人其し御流人  
御流人其し御流人其し御流人其し御流人其し御流人  
女多事多事有と申す御流人其し御流人其し御流人  
形し御流人其し御流人其し御流人其し御流人其し御流人  
と友人物、仁立御流人其し御流人其し御流人其し御流人  
し一御流人其し御流人其し御流人其し御流人其し御流人

少と尺受り申且又御流人其し御流人其し御流人其し御流人  
病死し其し御流人其し御流人其し御流人其し御流人其し御流人  
同埋物事其し御流人其し御流人其し御流人其し御流人其し御流人  
二月申築立石と建法名と申す尺雅し墓と供名と  
彫行方し御流人其し御流人其し御流人其し御流人其し御流人  
一唐園逗留申す御流人其し御流人其し御流人其し御流人其し御流人  
右し通申す御流人其し御流人其し御流人其し御流人其し御流人  
委愛使し御流人其し御流人其し御流人其し御流人其し御流人

子九月

長崎奉行宛

異國馳馬記開行



方安南國へ海流し一異國の争あるに於て海流は  
國の舶來し國糖を外國に賣求くことを交易の  
為なり 亦船へ返り行ありしに船主よりまじいしに便  
と云ふ 歸船とて一昔唐國破る所の船子たまた  
等、話を或書肆の珠より借り求又唐國破る  
の事從古後七ヶ條川伊予國税所長官にを徒を  
其船より琉球國の大島より唐國へ歸り唐中  
より暴風より流るる唐國の内廣東省の碣石港  
より海にありしより昔昌徳といふ大港より送れま  
し〜川路唐國を船で行く浙江省の乍浦より  
ありし時より一而船へ交易より海より唐國船より

昔長流し一歸船とて一話を從古後唐川税所  
三人の長崎唐國の友有りし海流の始末を  
紀向ありし一書といふものより其行なりと云ふ  
まを伝名するの文書と云ふ一唐國 醜為記聞  
と云ふ一之改正年壬午の昔下旬作海流  
より初めし一書より行りぬ 是を記すに



